

特集

新学習指導要領
完全実施に向けて

授業改善のポイントはこちら！

兵庫教育大学学長・
中央教育審議会副会長

梶田 叡一

子どもにも本当につけさせたい力は何か

―授業でいちばん大事にすること―

平成21年度から移行措置が実施され、新しい教育課程を明確に実施していく試みがなされています。今回は、どのように授業を改善するとよいか、梶田叡一先生の示唆をいただきました。



梶田 叡一

かじた えいいち* 1941年松江市生まれ、米子市で育つ。文学博士。京都大学文学部哲学科卒業。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長などを歴任、現職。

授業を仕組む視点

授業をする上でいちばん大事なことは、本時を通して子どもたちに、どういう力をつけさせたいのか、はっきりと頭に置くことです。そして、この本時が単元全体の中でどのような位置にあるのか、単元全体として最終的にはどういう力がつけばいいのか、見通しを明確にしておくことです。その上で子どもにつけさせたい力を順次考え、そのための手立てを想定して授業を仕組まなければなりません。

ところが、どういう力をつけさせるかではなく、どういう活動をさせるか、という視点だけで授業を考える人がいます。安易な授業観ですが、少なからず見られるものです。「何をネタにどういう活動

をさせるか」という視点で授業をすると、確かに活気のある活動ができます。それこそ、子どもの目がキラキラし、生き生きした授業を展開できることがあるでしょう。

でも、そうした授業で、果たして子どもたちに本当につけさせたい力がついていくかどうか、ということを考えてほしいのです。

俳句を取り上げて

例をあげてみます。
加賀千代女*の「朝顔やつるべ取られてもらひ水」という俳句があります。これを、どのように授業で扱っていくか、具体的に考えてみましょう。

例えばわたしが扱うなら、加賀千代女の句を中心に深く指導し、それを踏まえてほかのいくつかの俳句について自分なりに鑑賞

させ、最終的には子どもが自分なりに俳句をつくってみる、という順序立てで考えたいと思います。

ある先生が俳句の指導をどうしたらよいか、話しておられるのを聞いたことがあります。

「結局、俳句とは季語があつて、5・7・5です。まずこの俳句に季語があるということ、5・7・5になっていることを、子どもに見取らせませす。そして、ほかの俳句についても季語探しをさせ、さらにやはり5・7・5になっていることを確認させます。そして季語の入った、5・7・5の組み立てになった俳句を子ども自身につくらせませす。特に季語探しの活動は、子どもたちが興味をもって喜んでやりますよ」といった趣旨でした。

季語探しをやつて悪いとは思いません。でも、季語探しという活動のネタにするというだけのために、わざわざ加賀千代女のこの俳句をもつてくる意味はないわけです。

俳句でも短歌でも詩でも、それぞれ約束事を大事にしている、という面が確かにあります。しかし、その約束事にのっとつて言



葉を組み合わせさせれば俳句や短歌や詩になる、というものはありません。表現したい、訴えかけたいという感動なり、思いなり、こだわりがないと、俳句や短歌や詩はできないのです。ひとつの俳句を鑑賞する、ひとつの短歌を鑑賞する、ひとつの詩を鑑賞するということは、作者のこころした心のこだわりを受け止めて味わう、ということではないでしょうか。それがなければ、俳句や短歌、詩と、本当に出合ったことにはならないわけです。

この句を子どもたちにどう出させたらよいか

では、加賀千代女の「朝顔やつるべ取られてもらひ水」を、どう子どもたちに鑑賞させたらよいのでしょうか。

「朝顔」が季語で、続いて「つるべ取られてもらひ水」を合わせ全体で5・7・5になっていますが、それを確認するだけでは鑑賞になりません。

子どもに、「この句はこういうことを伝えようとしているのか

な」と尋ねたら、多くの子どもは「朝顔が咲いていて、そのつるが井戸のつるべに巻きついてたんだ。つるべに巻きついたつるをほどくことをしなかつたから、よそから水をもたらってきたのだよ」と答えるでしょう。

そういう情景描写しただけの俳句が面白いでしょうか。250年も言い伝えられてくるでしょう。ある感動がある心のこたわりが読む側に伝わってきたものしか残らないのではないのでしょうか。文学作品とはそういうものか。文学作品とはそういうものか。ということ、子どもにどこまで気づかせたいと思います。

作者の世界に踏み込むためには、教師から、「何で、よそから水をもたらしてこなくてはいけないのだらう、どうしてつるべに巻きついたつるがほどけなかつたのだらう」という問いを出さないといいません。

そうすると「朝顔のつるがせつかく巻きついているのに取っちゃつたら、かわいそうでしょ」とか、いろんな答えが子どもから返ってきます。

教師は、「そうだよ、この句

には加賀千代女の優しい気持ちがか確かに出ているよね。でも自分の家の井戸から水を自分で汲み上げないで、いつでも水を近所からもらっていたのだらうか、そういうことでやつていった人だつたのだらうかね」と問い直さないといいけません。

普段だつたら加賀千代女も毎朝炊事洗濯をしないとけないから、例え優しい気持ちをもつていたとしても、つるべに巻きついたつるを全部取つて、井戸の水を何杯も汲み上げたに違いないのです。でも、その日に限つてできなかった。なぜできなかったかという、その日の朝顔が、このほかきれいだつたからです。「わあ、すごいな!」と思つたから、「今日は特別!」という気持ちになつて、つるべに巻きついたつるをほどけなかつたということでしょう。この心情を読みとらせてあげたいものです。

「朝顔」の「や」は「切れ字」です。小学生には難しいかもしれませんが、切れ字の前かあとに自分の心が動いたとか感動したとかいうことを示します。「朝顔に」ではありません。「や」と「に」



のどちらが使っているかは大事です。「朝顔に つるべ取られて もらひ水」でも、意味としては同じかもしれません。でもここは「や」なのです。だから、ここでは「ああ、朝顔！」という感動があったことを示しています。ここでは下の句の形で注釈を付けて、どれだけ今日の朝顔が特別だったか、ということをやっているのです。普段だったらやらぬ「もらひ水」までしたのは、つるべに巻きついていたらつるべが引かれないので、という説明をつけているわけです。

1 1つの授業のねらい

だからその感動を、今日は、このほか特別だったということ、先生がどこまで説明するか、子どもにどこまでわからせるか、ということがなくてはなりません。問いの形でポイントとなる点を子どもにも考えさせる、気づかせる、という問いの系列を準備しておく必要があります。そうしないと、単なる状況描写の読み取りで終わってしまうでしょう。そ

れでは、この俳句との本当の出合いがないわけです。「この俳句には、このような形で心に訴えかけるものが秘められている。それを味わってみよう。その上で俳句の約束事としての季語と5・7・5も確認しよう。このように、みんなも俳句をつくらうときには自分なりのこだわりを強くもつてつくらうね。季語と5・7・5がありさえすれば俳句になるわけではないからね」と、こういう指導をしたいものです。

1 文学の三つの空間

ここで、いつもわたしが言う文学作品との出合い方の話をしておきたいと思います。韻文でも散文でも、ひとつの詩や文章と出合う際には、三つの世界(意味空間)を想定しておかなくてはなりません。それは「テキストの世界」「作者の世界」「読者の世界」です。フランスの批評家モーリス・フランクは『文学空間』の中で、この三つの意味空間のことを論じています。その三つの空間は、相互に関係しているけれど

も違うわけです。文学作品としていえば、やはり根本になるのはテキストです。だからまず、子どもたちにテキストの空間をきちんと押さえさせないといけません。「や」というのは切れ字だねとか、これは5・7・5になっているねとか、季語がある世界」の読み取りになるわけです。これをきちんと押さえることが大事です。

でも、その後で作者はどういうつもりでつくったのだろう、それはテキストにどう表現されているのだろう、ということを考えていかなければならないのです。作者の側の意味空間に参与するよう学びを進めさせていくわけです。

それを踏まえたら、今度は自分がそれをどう受け止めるのだろうという読者の側の意味空間が問題になります。しかし実際の授業では、テキストの空間の押さえ方が十分でなかったり、さらに作者の空間と読者の空間の混同があったりしている場合が少なくありません。これではめちゃくちゃです。

国語の授業づくり、特に詩的な世界を授業でどういうふうに出るか、子どもにどう出合わせるかを考えてみました。

国語授業の基本

一般論としていえば、「授業は活動主義ではないけない」ということです。子どもにどういう力を付けさせたいか。この教材との出合いによって子どもの中にどういった新しい気つきを、新しい力を育てていくことになるのか。そのためにもどのよう授業を組み立てていけばよいか、大切です。

例えば発問の系列をどういうふう用意して組み立てないといけないのか。教師の側からきくと説明をして子どもに気づかせなければならぬのは何か。子ども自身に自分なりに取り組ませないといけない課題は何か、といったことを考えて、単元を通じての授業の全体を組み立てて準備しておかないといけません。子どもに本当の力をつけさせる授業とは、こういうものだと思います。うのですが、いかがでしょうか。

平成22年度
新学習指導要領完全実施に向けて

授業改善のポイントはこちら!

国語科



小森 茂

青山学院大学教育人間科学部教授

1 新国語科の考え方

その役割とは何か

なぜ、新国語科の「言語活動」は現行の「3内容の取り扱い」から「2内容(2)」「格上げされたのか。それは、新国語科の「言語活動の充実」が他教科等の「言語活動の充実」に役立つようにするためにある。

その「ねらい」は、新国語科の「言語活動の充実」が基礎・基本となつて、例えば理科の観察・実験レポートや社会科の社会見学レポートの作成や推敲、発表・討論など、他教科等の「言語活動の充実」に役立つためである。それは、新国語科の「習得と活用」を推進することで、新教育課程全体で「思考力・判断力・表現力」を育成するためである。

2 新国語科授業づくりの基本

新国語科の「習得と活用」を推進するために、従来以上に①相

手意識、②目的意識、③場面条件状況意識、④生きた理解表現意識、⑤評価意識をもつて「記録、要約、説明、論述」といった言語活動」に取り組むことである。

次に、これらの「言語活動」で「習得・活用」された「既習の学び」を次の単元や次の学期等で意図的・計画的に活用することである。さらに、他教科等の「言語活動の充実」のためには、これらの「言語活動」と「既習の学び」とを「対」にして「本時の学習指導案」等を作成することである。

3 各領域等のポイント

①「A話すこと聞くこと」では、各学期の指導計画には、例えば「説明や報告を発表したりす

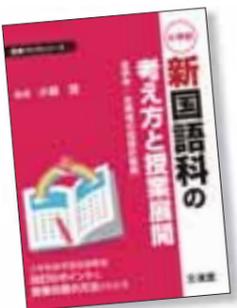
ること」などの言語活動例の具体化、つまり、「習得・活用」された「既習の学び」を意図的・計画的に位置づける。授業展開では、単元ごとに示された言語活動例を反復的・螺旋的に学習できるようにする。それは、各学期で身につけた「既習の学び」を反復的・螺旋的に高めることである。

②「B書くこと」でも、各学期の指導計画には、例えば「説明や報告を書いたりすること」などの言語活動の具体化、つまり、「習得・活用」された「既習の学び」を意図的・計画的に位置づける。授業展開では、単元ごとに示された言語活動例を反復的・螺旋的に学習できるようにする。それは、各学期で身につけた「既習の書く力」を反復的・螺旋的に高めることである。その際、例えば「記録力」「要約力」「説明力」「論述力」を中心に、「B書くこと」の言語活動を、他教科等の「言語活動の充実」に役立てる工夫が必要である。

③「C読むこと」でも、各学期の

指導計画には、例えば「目的に応じて説明などの多様な本や文章を読んだりすること」などの言語活動例の具体化、つまり、「習得・活用」された「既習の学び」を意図的・計画的に位置づけることである。授業展開では、各単元で身につけた「既習の読む力」を反復的・螺旋的に高めることである。特に、「C読むこと」ではPIISA型読解力を育成するため、情報の取り出し、解釈、熟考・評価等の学習指導を工夫する必要がある。

④「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、「伝統的な言語文化」と「国語の特質」とを結び、「との関係を重視する授業展開が基本である。



授業づくりシリーズ①
『新国語科の
考え方と授業展開』
小森茂編著(文溪堂)2,310円

梶田 勲一先生の教育コラム開設!

ぶんけい 教育コラム

検索

平成22年度
新学習指導要領完全実施に向けて

授業改善の
ポイントはここだ!

社会科



北 俊夫

国立大学 体育学部教授

平成23年度の学習指導要領完全実施に向けて、いま何を準備するか。また日々の社会科授業をどのように改善するか。ここではそのポイントを3つ述べる。

1 新教材を開発し先行実践する

平成22年度には、4年の「県(都、道、府)の様子」の学習で「自然環境、伝統や文化などの地域の資源を保護・活用している地域」を先行して取り上げる。これは今回の改訂で追加された内容である。そのため、3・4年(下)の教科書や社会科副読本には、これに相当する教材が掲載されず、各学校で開発し準備しなければならない。

「47都道府県の名称と位置」(4年)や、「世界の主な大陸と海洋」「主な国の名称と位置」

(5年)などの内容は、地図帳や地球儀を活用して引き続き前倒しして指導する。白地図を活用した作業的な活動やドリル教材による繰り返し学習が効果的である。ここには、習得した名称を活用して、自分たちの住んでいる県(都、道、府)や日本の位置を広い視野からとらえ説明できるようにすることにねらいがある。

このことに留意して指導したい。

各学校において、新教材を開発し、指導方法を研究することによって、平成23年度からの新しい社会科授業に備えることができる。

2 新しい指導計画を作成する

平成23年度から使用する新しい教科書は、22年度の夏に決定される。また各地域では、社会科副読本の編集作業が加速され

る。各学校では、新学習指導要領の総則および社会科の趣旨をふまえて、平成23年度からの指導計画の作成がはじまるが、その際、次の諸点に留意したい。

- 基礎的・基本的な知識や技能を明確にし、それらを確実に身につけさせる。
- 習得した知識や技能を活用して、問題解決のために必要な思考力、判断力、表現力などの能力を育成する。
- 社会科においては、調べる能力とともに、特に「話し合う活動」「書く活動」といった言語活動を重視し、言語力の育成に努める。
- 問題解決的な学習を重視し、子どもたちが学習に主体的に取り組む態度を養う。
- 子どもが学習計画を作成することにより、問題解決への見通しをもつて学習できるようにする。
- 学習をふり返る場面を取り入れ、学習への成就感や達成感を味わわせる。

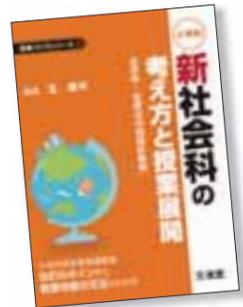
これらはいずれも、社会科の授業改善のポイントである。いまか

ら実践することができる。

3 「知識の構造図」を作成する

「社会科は何を教えたらよいかかわからない」という声をたびたび聞く。これが社会科の授業は難しいとされる要因である。社会科の授業では多様な知識が数多く登場し、それらが複雑に絡み合っている。概念的な知識もあれば、それを説明するための知識もある。用語や語句などの知識も扱われる。こうした知識を階層的に整理したものが「知識の構造図」である。これは、指導計画を作成する際の基礎資料となる。また、知識と知識の関係性を明確にすることができる。

単元(小単元)ごとに作成した「知識の構造図」と指導計画との一体化を図ることが、「知識や技能の習得とその活用」という課題に応えることになる。



授業づくりシリーズ②
『新社会科の 考え方と授業展開』
北俊夫編著(文溪堂)2,100円

平成22年度
新学習指導要領完全実施に向けて

授業改善の
ポイントはここだ!

算数科



清水 静海

帝京大学文学部准教授

新学習指導要領では、言語活動の充実が基本に据えられ、例えば、「思考力、判断力、表現力等をはぐくむための学習活動」を教科領域を横断して重視することが明示され、その「基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語」であるとして、言語観が広げられ、算数・数学には言語としての役割がこれまで以上に重視されることとなった。中央教育審議会答申(平成20年)では、「論理や思考といった知的活動の基盤」という言語の役割に着目した場合、比較や分類、関連づけといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する(中略)といった言語活動が重

1 言語としての算数

要であり、これらの活動を行う算数・数学や理科の役割は大きい」とされている。この大きな期待にしっかりと応えてゆくために、的確かつ積極的な対応を開発し実現してゆく必要がある。

以下、算数科の目標で改善が加えられたことを中心にポイントをまとめる。

2 算数的活動を通すこと

授業は基本的に「算数的活動を通して」行われることが要請されている。算数的活動は「児童が目的意識をもち主体的に取り組む算数にかかわる様々な活動」であり、学びの内容や方法として、また、学びを導く方法として位置づけていく必要がある。算数的活動については、小学校学習指導要領解説算数編において

「算数に関する課題について考えたり、算数の知識をもとに発展的・応用的に考えたりする活動」や「考えたことなどを表現したり、説明したりする活動」が例示されていることは重要である。

3 表現する能力を育成すること

表現する能力の育成を、「見通しをもち筋道を立てて考えること」と関連づけ、とりわけ、説明する力を鍛えることが要請されている。ために、まず、日常の事象について考察し、自分の考えをしっかりとるようにつとめることである。そして、自己内対話を通して的確に表すことができるようにすることである。さらに、説明し学び合うことを通してより質の高いものにしていくことを実践することである。これらを通して、よりよく表したり説明したりできるようにするとともに、それらの必要性やたらきに気づき積極的にかかわることができるよう導く必要がある。

4 進んで活用すること

算数を「進んで生活や学習に

活用しようとする態度」の育成が要請されている。ために、活用の仕方や活用することのよさを明らかにし、算数の活用をその文脈や場面に応じて適切に行うことができるよう導く必要がある。その際、日常の事象について単純化したり理想化したりして算数の言葉を用いて表し、算数の問題に改めることが必要になり、このことについての意図的、計画的な対応が必要になる。

前述の1~4のことについては、全国学力・学習状況調査における、いわゆるB問題の結果を踏まえ、出題の趣旨を的確にとらえ、授業改善に生かすことがもつとも早道といえる。



授業づくりシリーズ③
『新算数科の 考え方と授業展開』
清水静海編著(文溪堂)2,310円

22年度 移行措置 完全対応

A
基礎・基本
Aテスト

N
基礎・基本&活用力
Nテスト

「ピッタリのテスト」が選べます!!

A
基礎・基本
Aプラステスト
プレテストつき

N
基礎・基本&活用力
Nプラステスト
プレテストつき

平成22年度
新学習指導要領完全実施に向けて
授業改善の
ポイントはここだ!
理科



角屋 重樹
広島大学大学院教育研究科教授

小学校理科の新学習指導要領改訂のポイントと授業改善の方法を明確にするため、まず新学習指導要領の改訂のポイント、次に授業改善のポイントの順序で述べることにする。

1 新学習指導要領の改訂のポイント
 新学習指導要領は、子どもが基礎的・基本的な知識・技能を習得するとともに、思考力・判断力・表現力などの能力を獲得することを目指している。
 これらを理科の学習指導過程で具体化させると、

- 1 問題の見だし方
 - 2 予想の設定の仕方
 - 3 観察・実験の器具の扱い方
 - 4 観察・実験結果の整理の方法
 - 5 事象の性質(科学的な用語を含む)や規則性の獲得
- 子どもが①～⑤を獲得する学習指導過程は、次の6つの場面から構成することが多い。それらは、子どもがまず、
- 1 問題を見だし
 - 2 その問題となる事象を説明するための仮説を発想し
 - 3 発想した仮説の真偽を確かめるための実験方法を立案し
 - 4 実験を行い
 - 5 実験結果について考察し
 - 6 獲得すべき事象の性質や規則性を明確にし、新たな問題を見いだす
- という場面である。
- 2 授業改善のポイント**
 授業改善のポイントは、以下の5点が大切である。
- ア 子どもが問題を見いだすには、事象の中から違いを見いだすことができるようにする。



授業づくりシリーズ④
『新理科の 考え方と授業展開』
角屋重樹編著(文溪堂)2,310円

- 1 子どもが問題となる事象を説明するための仮説を発想するには、現象の中から異なる要因を見いだしたり、既有的学習経験を想起して類似関係などを適用したりできるようにする。
- 2 子どもが解決方法を発想するには、既有的知識に類推などを適用して発想できるようにする。
- 3 子どもにも実験結果について考察させるには、仮説と実験結果を一致、不一致という視点で判断できるようにする。
- 4 子どもが行ってきた問題解決過程を見直し、新たな問題を見いだすようにするには、事象の性質や規則性などから得た知識や技能を、それらを得る手続きとともに、これから追究する問題を明確にできるようにする。

角屋式学習指導法

- 基礎的・基本的な知識や技能と思考力・判断力・表現力などの能力を育てる学習指導過程は、子どもが問題を見だし、仮説を検証していく活動を基底としており、子どもの主体的な活動のためには次のような工夫が必要になる。
- 1 問題を見いだす場面における工夫
 子どもが観察している現象どうし、あるいは、その現象と既有的知識の間に「ズレ」を発生させる。具体的には、子どもが比較や分類などのスキルを適用し観察している現象どうし、あるいは、その現象と既有的知識との間に違いを見いだすようにする。
 - 2 仮説や解決方法を発想し、実行する場面における工夫
 子どもが既有的知識を適用し、仮説や解決方法を発想する。具体的には、子どもが仮説を発想するために、既有的知識・技能の中から類似などのスキルを適用し、仮説や解決方法を発想するようにする。
 - 3 結果を考察する場面における工夫
 子どもが仮説と方法について評価する。具体的には、子どもが仮説と実験結果の関係から、両者が一致あるいは不一致を判断する。また、実験結果が仮説と違った場合は、仮説と実験方法を再考し、その原因を探るようにする。